

熊本地震における「ブリコラージュ」的連携の試み

——創発ネットワークの変動過程に着目して——

大阪大学 王文潔

1 目的

本報告の目的は、災害支援の創発ネットワークの変動過程にみられるつながりの連結、活動領域の推移等の諸事象を通して、災害支援における「ブリコラージュ」による連携の限界と可能性を捉えるものである。「ブリコラージュ」は災害支援のプロフェッショナルのみならず、寄せ集められた者/もので自己組織的に創発することを指す。これは「小規模のNPO群」が特徴であり、市民活動の地域格差が顕著である日本において災害時連携の象徴的な事象ともいえる。また、刻一刻と大きく変化する災害の現場において、ブリコラージュ的な支援の担い手は「そもそもなぜ連携が必要なのか」、「連携がどのレベルで必要なのか」といった切実な問いを突き付けられている。本報告は、このような災害事象の、時間と空間の中で進行していく「手探り」の連携プロセスに焦点を当てる。

2 方法

事例分析の対象として、熊本地震後に立ち上げられた「よか隊ネット熊本」を取り上げる。このネットワークは情報共有、事務局による中間支援、共同事業という連携の典型的な要素をもつことに加え、災害前後のネットワーキング状況等の点から、今後の災害時連携に向けて重要な示唆を与えるネットワークといえる。「よか隊ネット熊本」事務局及び活動団体の職員に対する異なる時期におけるインタビュー調査と、団体会議や企画活動等への参与観察を行った。

3 結果

このネットワークについて創設動員期、連携適応期（活動確立）、連携適応期（組織化）という区分を設定し、時期ごとの動きを整理した。その結果、何度も岐路に立ち、活動の方向性を調整する等の連携のプロセスが浮き彫りになった。当ネットワークは直接支援と連携型支援の両立を目指しているものの、単独事業体として扱われることが多い。また災害フェーズの推移に伴い、既存社会システムの追いつかない課業を遂行するとともに、みなし仮設入居者、在宅被災者等の既存システムから取り残されたニーズに対応するという創発的な機能を果たした。「よか隊ネット熊本」はこういった潜在ニーズへの対応を活動領域として確立し、既存システムの要請を受けるような代替システムではなく、主体的な「アクション」を起こす創発ネットワークである。したがって、「潜在ニーズを汲み取れない」、「確実な支援につなげるための専門性に欠ける」といった問題が現れるたびに、このネットワークが活動領域の喪失という危機に立たされている。

4 結論

「災害は長く連鎖した社会的時間の中での一つの結果でもあり、かつ今後の社会過程の変化を促す原因」（浦野 2010:13）である。ブリコラージュ的な連携の直面する問題は既存地域ネットワークの脆弱性に起因する。したがって異なる活動領域をもつものの、組織基盤が未熟であるという特徴のために、ブリコラージュ的な連携はチーム化を余儀なくされる。その上で、ブリコラージュ的な団体に社会課題への関心をもたせ、フィールドを災害支援に向けてコーディネートし、地域の社会資源としての復興力になる可能性を示唆する。

文献

クロード・レヴィ＝ストロース著、大橋保夫訳、1976、『野生の思考』みすず書房
浦野正樹、2010、「災害研究のアクチュアリティ」環境社会学研究(16):6-18